天文教育　Vol.31 No.1 通巻156号 2019年1月25日発行（発行日：奇数月25日）

天文教育

2019 1

Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy

＜特集＞学生でもできる、学生だからできる、天文教育普及

～関東支部会（2018年11月25日）の開催報告～

＜投稿＞月食写真で三重県を描こうプロジェクト2

＜新連載＞研究解説 オランダでの望遠鏡発明の全容

一般社団法人 日本天文教育普及研究会

本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

1. **原著論文**：天文教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクトには英文も付けてください。
2. **解説記事**：天文学や天文教育・普及に関する解説・紹介記事。分量は刷り上がりで 6～10 ページ程度。
3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告、また天文教育・普及に関する授業の実践例など。分量は刷り上がりで 2～4 ページ程度。
4. **書　評**：天文学や天文教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで 1 ページ程度。
5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで 1 ページ程度。
6. **表紙の写真**：タイトルと 400 字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。

・**締め切り**は 1 は原則として奇数月末日、2～7 は偶数月 15 日。投稿先は post@tenkyo.net です。

・**広告掲載**を希望される方は事務局（jimu@tenkyo.net）までお申込みください。掲載料は B5 判 1 ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4 ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。

※本誌に掲載された記事は、当会 Web サイト（https://tenkyo.net/）にて PDF ファイルの形で公開を予定しております。
インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡をお願いいたします。

なお、2014 年 9 月号から、当会会員に対しては会誌発行後に速やかに、パスワード制限をかけた形で閲覧できるようにし、発行から 1 年経過後にパスワード制限を解除して、広く一般に公開いたします。

【編集委員会からのお願い】

『天文教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願いいたします。

・原稿の投稿は、原則として Microsoft Word ファイルでお願いします。
・執筆用のテンプレートがホームページ（https://tenkyo.net/）からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いします（執筆上の留意点なども記しています）。
・充分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
・提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
・Word 以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
・原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願いいたします。

投稿先・質問先　メールアドレス：**post@tenkyo.net**

表紙の言葉

部分日食中の新月

2019 年 1 月 6 日 10 時 22 分、TAKAHASHI FC50（2 倍エクステンダー,fl=800mm, F=16）,ND400, ISO400, 1/800 秒（東部・湯の丸 SA,東御市、長野県）
撮影者：大西浩次

部分日食の主役は太陽ではなく月である。月が太陽を隠す。ただ、月は自ら光ることが出来ないので、シルエットとしてその姿を浮かび上がらせる。

2019 年中に、日本国内で 2 度の部分日食を見ることができる。その最初の部分日食が 1 月 6 日の午前中に起きた。全国的に曇りがちの天候であったが、2016 年 3 月以降、ほぼ 3 年ぶりの部分日食に多くの人が楽しめたのではないだろうか。一方で、事前の「安全な日食の観察」の周知が少なかったこともあり、不適切な方法で太陽を眺めた人がいるのではないかと不安が残る。2012 年 5 月 21 日の金環日食のキャンペーンのまとめをしっかりと行い、常時、参照できる資料を Web 上に置いておく必要性を感じている。

さて、ここで、薄雲を通して撮影した今回の部分日食を紹介しよう。この写真では、欠けている太陽が右下にずれている構図である。一見、不自然に見える構図の意味が、まさにシルエットの新月と太陽を同時に撮影することにある。もう一度、表紙を見て、新月の姿を想像していただきたい。

なお、今年 2 度目の部分日食は、12 月 26 日の夕暮れにおきる。この日食はインドネシア方面では金環日食に伴う日食だが、国内では南に行くほど大きな食分になる。また、東日本では太陽が欠けたまま沈むので、東日本の日本海側では海に沈む部分日食が眺められる。楽しみだ。

（大西浩次）